

カラマツ採種園の着果調査を実施（環状剥皮の成果）

〔東信署・中信署・森林整備課・技術普及課〕5月26日東信署管内の清万採種園において、カラマツ種子の着果状況調査を行いました。

カラマツ苗木生産は、植付箇所減少から縮小傾向にありましたが、近年のカラマツ合板や集成材への需要が高まる中で、カラマツは豊作年の周期が6～8年と長い為種子が不足している状況にあります。

中部森林管理局では、カラマツ種子の不足を補うため平成26年度から種子の販売を行ってきており、昨年度は、優良種子の更なる安定的な供給に向けて、当採種園で30年ぶりとなる採種園の整備とカラマツの着果促進に有効とされている「環状剥皮」（樹皮を一定の幅で半周ずつはぎ取り刺激を与えて花芽形成を促す方法）を行いました。

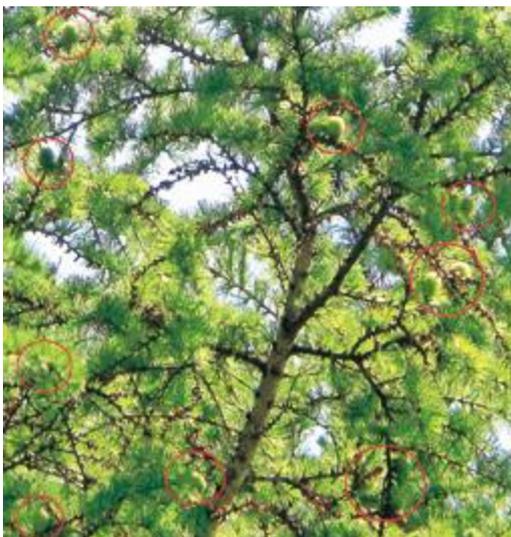
今回の調査は、昨年実施した「環状剥皮」箇所と未実施箇所を比較し「環状剥皮」の効果の検証も含め実施したものです。調査には、職員25名の他に長野県担当者、長野県林業総合センター、長野県山林種苗協同組合や関東局職員も参加し、約500本あるカラマツ精英樹を一本ずつ双眼鏡等により確認しながら球果を探しました。

調査の結果、環状剥皮を行った精英樹40本は試験的に全周剥皮や剥皮幅を変えて実施したこともあり、全周と12割幅剥皮などの20本は枯れてしまいましたが、残りのうち15本で着果が確認され鈴なり状の精英樹もあり環状剥皮の効果を確認しました。この他の精英樹約460本中、62本に着果を確認しました。

昨年度は、採種園での着果がほとんど確認できなかったことから、採種園整備と環状剥皮の効果が見られた結果となりました。

また、UAV（ドローン）を活用した調査も試験的に行い、一部ではありますが上空から着果状況の撮影を行いました。

今回の結果も踏まえ、採種園に隣接している展示林内（旧採種園）においても来年に向けた着果促進のため環状剥皮を行うなど、引き続き採種園の整備を行いカラマツ種子の安定的な供給に向けて取り組むこととしています。



着果した種子



上空から撮影した着果木